



## 他人事ではない米国の“西ナイル熱”

### TITLE

最近、新聞等で米国におけるウエストナイルウイルス感染症（いろいろな表現があるが、東大名誉教授の山内一也先生によると西ナイルは不相当と。）の大流行の記事を目にする。8月末の記事では米国20州で453人の感染が確認され、21人が死亡したと報道されたのが、9月27日の米疾病対策センター（CDC）のまとめで患者は2339人、死者は116人となっていた。9月中旬をピークに10月上旬は半減しているが、10月21日現在、陽性者は3231人、死者176人。

### <西ナイルウイルスとは>（朝日新聞まとめ）

1937年にウガンダで確認された。黄熱や日本脳炎、デング熱などのウイルスと同じフラビウイルス科に属す。蚊を媒介としアフリカから中近東、インド西部まで生息。1974年の南アフリカでの流行では発熱程度だったが、イスラエルなどの感染では1割程度に脳炎の発症があり、ウイルス株によって毒性が大きく異なる。一般的には人に感染すると数日の潜伏期間で発熱、頭痛、筋肉痛などを起こす。ワクチンや特効薬はなく、対症療法しかないため、早期治療が必要だ。感染しても多くが発症しない不顕性感染か、熱程度の症状でおさまる。高齢者や免疫力の弱まった人の場合、時に脳炎を発症して死亡することがある。

国立感染研情報によると、潜伏期間は5～15日。臨床症状は、多くは不顕性感染におわることが発症した場合以下のような病態となる。通常型は急激な熱性疾患として発症し、頭痛、背部痛、メマイ、発汗、時に猩紅熱様発疹（約半数の症例で認められる）、リンパ節腫大、口峡炎を合併する。患者は第3～7病日に解熱し、短期間に回復する。発熱は二峰性を示すこともある。脳炎型は重篤で高齢者によくみられる。中央アフリカでは激症肝炎を併発した症例が報告されている、また心筋炎や睪炎を併発した例もある。臨床検査所見は、白血球減少、脳炎患者の髄液では細胞増加とタンパク上昇が認められる。治療法は、対症療法である。ウイルスは発症初期の血液から分離されることが多い。ウエストナイルウイルスはイエカ-鳥のサイクル（感染環）で維持されている。近年の流行としては1999年のニューヨークにおける流行以前にも、1994年アルジェリア、1996年ルーマニアにおいて流行した。

1999年に突然流行し、翌年にも流行したニューヨークでの大流行時、日本医師会雑誌 [125(2) : 211, 2001] に解説記事があった。曰く、「わが国を考えると、無免疫の人々と、アカイエカとカラスという2つの条件はそろっており、あとはウイルスが持ち込まれるかどうかで、流行する可能性はきわめて高い。ニューヨークから東京まで飛行機で12時間である。」と。しかし、まだわが国に発症の報告はない。

蚊が媒介して鳥や哺乳（ほにゅう）類から人間に感染するとされるが、最近米国で新事実が判明した。新聞の記事を紹介する。

### ◇臓器移植で西ナイル熱感染？

米ジョージア州の女性から臓器移植を受けた4人のうち3人が西ナイル熱を発症し、1人が死亡した。臓器摘出の直前に採取された女性の血液試料から西ナイルウイルスが見つかったことから、CDCなどは臓器移植に伴って感染した可能性が強いとみて調べている。CDCによると、女性は7月30日に交通事故に遭った後、大量の血液製剤輸血を受けており、蚊に刺されたのではなく、輸血でウイルスが体内に入った疑いが持たれている。生前に発症していたかどうかは不明。臓器移植を受けたのは同州とフロリダ州の各2人。移植後、全員に高熱や脳炎、神経症状などが現れ、フロリダ州の1人を除く3人の血液から西ナイルウイルスが見つかった。3人のうち、ジョージア州の1人は8月29日に死亡した。（2002.9.5.朝日）

検査が遅れていたフロリダ州の女性の血液からもウイルスが検出され、4人全員が西ナイル熱だったと分かった。CDCは移植の際に血液を介して感染したことはまず間違いないとみるとともに、生前に臓器提供者に輸血された血液製剤を提供した献血者63人の試料でウイルスの有無を調べている。（2002.9.6.朝日抜粋）

### ◇米国の西ナイル熱、新たに輸血血液による感染例 (2002.9.6.朝日)

米国で流行している西ナイル熱で、新たにウイルスで汚染された血液製剤輸血による感染と疑われる症例が見つかった。CDCが5日、発表した。ミシシッピ州の女性で、7月に産科で手術を受け、18人の血液でつくった血液製剤を輸血された後、西ナイル熱の脳炎を発症した。女性は快復した。CDCはウイルスが体内にあるものの症状のほとんどない人が11万～15万人に達していると推定、こうした人からの血液にウイルスが含まれていた可能性があるとしてみている。

### ◇西ナイルウイルス、米で大流行

「西ナイルウイルス」が米国で大流行し、死者が出ていることを受け、厚生労働省は9月23日から担当職員を米国に緊急派遣し、情報収集することを決めた。（途中略） CDCは9月19日、「輸血や臓器移植でも感染することが確認された」と発表しており、厚労省では、献血血液の安全確保のためにも、職員の緊急派遣が必要と判断した。同省では現在、渡米する人に、虫よけ薬の使用や、長そで長ズボンの着用を呼び掛けるチラシを空港で配布。ウイルスを持った蚊が航空機で運ばれてこないか監視するため、検疫所での検査も実施している。（2002.9.23.読売）

### ◇母乳にも西ナイル熱ウイルス

CDCは27日、母乳に西ナイル熱のウイルスが混じっているケースが見つかったと発表した。衛生当局は、母乳感染の危険性について詳しい調査を始めた。見つかったのは、今月2日に出産したミシガン州に住む40代の女性の母乳から。出産して数日後に発熱し、西ナイル熱と診断された。女性は出産当日と翌日に輸血を受けていた。同じ提供者の血液を輸血された別の1人も、西ナイル熱を発病していた。この女性はすでに快復している。赤ちゃんも母乳を2週間ほど与えられたものの、今のところ健康に問題はない。

西ナイル熱が母乳を介して乳児に感染する証拠はない。衛生当局は母乳や赤ちゃんの血液をさらに詳しく検査している。CDCは「母乳には利点が多く、ただちに母乳育児をやめる必要はない」と呼びかけている。  
(2002.9.28.朝日)

以上、新聞の切り抜き記事でウエストナイルウイルス感染症の大流行を紹介して“対岸の火事”ではないと警鐘を鳴らす目的もあったが、輸血によっても伝搬するとなると、エマージェント感染症としての対策ではすまされない事態になることも考えられるのではないかと思い、原稿を書いた。収集した情報すべてを近日中にHPにアップしたいと思っている。（白倉）